

問題解決学習と個の成長

西 良孝

一、中学三年の時のK男との出会い

「アング、死ね」K男の口からよく発せられる言葉である。彼は友だちとの間で少しでも気に入らないことがあるとこの言葉を口ぐせのように言い、相手を威圧し自分の意図を通そうとする。そのすきんだ言葉を聞くたびに私はゾットする。彼は言葉遣いがきつのみでなく、感情の起伏が大きく、奇声を発する、喧嘩はする、授業中は足を横に大きく出したり私語が多いなど、今までもたびたび生徒指導担当者の世話になってきた。

当時の中学三年生にはこのような生徒が数名ほどいたが私は**K男たち**がいるクラスの担任となった。

このクラスの子どもたちを受け持ち、問題をおこさせることなく卒業までもちこたえるためにはK男がカギであり、この子を知り、育てていかねばと考え、抽出生として重点的にカルテをとった。中学校は教科により指導者がかわるものの当時担任の選んだ研究に係る抽出生には関係の全教師から学習の状況などがカルテに書き込まれ、いろいろな様子を知ることができた。その一例を紹介すると、

(国語) 集中力に欠ける。興味散漫。

(保健) バスケットの練習中に捻挫し、病院へ行く。学校保健会に申請すると話したところ、三割負担について疑問を持つ。

(数学) 授業中おどけたりすることがある。テストでは基礎的な計算問題はできるが、説明問題は全くできていない。

などである。学習面でも生活面でも根は厳しさに耐える力が十分育っていないことがうかがわれた。しかし、一対一で親身になって話をすると子どもらしい一面をのぞかせることもあった。最近の悩みはと聞くと「勉強のこと」と答え、一人っ子で両親と三人暮らしの彼は将来家を支えていかなければいけない。責任感も芽生えてきているようなところもみられた。

そのような中、家族生活、地域社会の生活など身近な社会に関する学習を終えたあと「健康で文化的な生活の向上をめざして」という単元の学習をすることとした。

最初、私たちの将来の生活に関わっての不安や心配について話しあったところ、災害、戦争、病気、エネルギー不足の問題などと共に老後の生活のことが出された。このことに

ついて日本は今後きわめて急速に高齢化社会へと進んでいくことを資料で確認したあと、高齢者について見たことや思っていることなどを出しあった。「電車の中では厚かましい老人がいた」「わがままなところがある」「昔のことをよく言う」「いろいろなことを教えてもらえるのでよい」などの発言のあとで、ある男子が「病院へ行ったとき用もないのにだらだらと何かしゃべっていた」と発言したことから、病院へいくとお年よりの多いわけについて話題が向いていった。

これについて K 男も関わらせようと考え、彼の家近くの病院へ足を運び院内を観察したところ、確かに昼間はお年寄りが目立った。そこで私の見聞きした話も交え学級で話し合いを進めていった。

A 男 病院には冷暖房が整っているし、テレビや雑誌もあるし、沢山のお年寄りがきて話ができ、そのうえ医者がやさしいし、ある程度年をとるとただになるから行くようになる。

O 男 福祉課の人に聞いたけど医療費がただになるのでほんの少し体が悪くなくてもすぐ病院に行き、何か時間をつぶしに行くようなことを聞いた。

M 男 家ではあまり相手にされたことないけどここでは話相手がいるから行くんだと思う。

I 男 父が言ってたんだけど、ある病院では老人がくるとお茶とかカステラとか出すという話をしてたけど、老人のおかげで開業医なんかもうけていると思う。

H 女 年をとってくると体も弱くなって病気になりがちになるからと思う。

N 男 ぼくの言った病院の待合室には将棋などが置いてあって多くの老人がいたからそんなことで行くと思う。

K 男 ちょっと前に行ったけど暇つぶしをしていると思う。

このようなやり取りの授業のあとの調査結果を見たところ、K 男は「生きがいてなんやろ、これだけは絶対に知りたい」と書いていたのが目に入った。彼は一人っ子であり、事前の調査では「父が病気になったらかわりに僕が働かなければならない。その時しっかり働けるだろうか」と考えており、また「公園や学校の帰りによく老人を見かけるが、毎日何をしているのか」とも書いており、両親の将来にもそれなりの思いをよせていた。生きがいということもそれらと関わり、これは彼の心の中にある育てるべき一つであると感じた。

二、時事からの展開

次時は K 男の考えを学級全員に紹介して、生きがいは何かについて授業をしようと考えた。しかし私自身ここで「生きがいは何か」と自問したとき、答えられる何ものも無

いことに気づいた。その意味を考えているうち以後の八日間は授業ができなくなって他と振り替えてもらった。その間大学の恩師に生きがいについて尋ねたところ「生き方について、生物的に生きる、社会的に生きる、実存的に生きるといった見方ができる。生きがいは単なる生物的な存在ではなく社会的・実存的な実感であろう」といったことを伺い、K男には実存的とまではいかなくとも、少なくとも生物的に生きるのでは値打ちがないことをわからせようとして、九日後に授業にのぞんだ。

そこでK男の「生きがいがないから病院へ行くんだ」に対して「病院へ行くのは生きがいである」「そうではなくてうそで楽しくしているだけだ」「人それぞれに違っていて病院へ行くのが生きがいの人もいる」「病院へ行くのも生きがいのひとつと思う」などいろいろな意見が出て白熱し、その次の日も社会の授業を組み入れてもらって話し合いを続けた。展開が一段落したところで私はK男を頭に描きながら生物的に生きるレベルでは値打ちがないことを述べた。そのあと高齢者のための政策について調べることで、中学校でよくみられる社会科の授業を展開した。

しかし私にはこのあとも生きがいとは何かについてなおすっきりしないものが残った。それと共にKたちにとっての大した師でもない自分を感じていた。

彼はその後も荒っぽい言葉をつかい、時々問題を起こしたが、私と一対一になると純朴さものぞかせ、借りてきた猫のようなところもみられた。

三、生きがいについて

しばらくの時間がながれて、ある時教育テレビで竹取物語の解説の放送があった。そこで耳にしたことに私はハッとした。かぐや姫に求婚した中納言石上磨呂足がつばめのもっているという子安貝をとってくるように言われて結局はかなわなかった。そのときかぐや姫が詠んだ歌に「年を経て波立ちよらぬ住の江のまつかいなしときくはまことか」というのがあり、これは待った甲斐がないという意味と、貝がない即ち昔でいう宝物が無かったとい、意味を掛けてあるということであった。

このことから、生きがいは生きているはりあいであり、生きていくにあたって宝物とするようなものでもあると思うようになった。結局K男のつぶやきにはじまり私自身の生きがいの意味に関する勉強ともなったのである。

四、社会人となったK男のようす

昨年夏の集会で何かを話せと仰せつかったのを機会にこのことの話にもふれたが、現在のK男のことが気になって彼の家には電話をかけた。

以前小学校五年で行った公害についての学習で、中学二年になった子どもたちにどのよう

風化していたことを思い出して K 男の場合はどうなっているかやや心配であった。事実彼の同期生にも聞いたが中学校の授業で九年後も記憶に残していることはむしろめずらしい方のような感があった。授業で得たものは形をかえて各人の今のありようの一部として無意識の形で機能していると思われる。K 男が電話口に出たとき元気なしかもしっかりとした会社員の応対口調が返ってきた。「あっ、先生ですか。いろいろお世話になりました」「先生もご存じのように僕は思い込むとのめり込んでしまうところがあるけど、いまはゴルフに熱中し生きがいを感じています」とのことである。

高齢化社会の学習は今も記憶に残しており、近所のおばあさんが孫をつれて畑仕事をしているのをいつも見ている、おばあさんの幸せについて頭によぎるといようなことも話してくれた。充実しつつ自分の足で自分の人生を歩いているといった感じを受けた。

問題解決学習と個の成長

「先生こんな（話し合い中心の）勉強をされていて（受験は）大丈夫なんですか」以前三年生の生徒から言われた言葉である。このことの因果関係については何とも言える状況ではないが、私は正直なところこのようなこともふまえて教科書の配列によりかかり授業を進めている。しかし他方では問題解決学習に魅力を感じており、問題解決学習とまではいなくてもそれらしきものをやってみたいと考えているものである。この授業はそのようなことから次のことに心掛けた。

- ① カルテ等をもとに K 男の実態をできるだけつかもうとした。
- ② K 男が社会事象との相互作用を通して疑問に思っていることを顕在化させようとした。
- ③ それを学級の間へ出して、皆で考えを出し合うなかで、K 男を含む学級の子を育てようとした。

K 男は学校ではつっぱりながらも、つねづねやがては年老いていく両親の面倒を自分が見ることに遭遇するという不安にもた気持ちをもっている。また近所でよく見かける高齢者に対して何を楽しみに生きているのかという問いかけを持っていたようである。それを教科書の資料などにより、高齢化社会がまもなく到来するという厳然たる事実をきっかけとして彼のなかに漠然とあった意識をはっきりさせ、「生きがいとは何か」という形で一種の切実さをもった問題として顕在化していったように思われる。

私は彼の生活の範囲内のことも調べ、積極的に指名していったことにより、彼は授業で今までにない意欲的な取り組みをした。また事前事後の調査でもまじめに答えていた。同年代の学級の生徒も結局は K 男の波長に近い部分を擁していることから、話し合いが活発になされていった。さらに彼の切実さは私自身の切実さをも浮き彫りにさせたように思われた。タイトルで生徒の成長としなかったのはこの意味である。

問題は自己の追求から始まるとか問題解決学習を通じてのみ系統が成立するとかいわれるが、K男の実践を通じてこのことをかい間見たような感じがするのである。

かつて私は倉敷で開かれたときの集会テーマ「子どもの思考の成熟をうながす教材の発見」に対して、子どもに思考が成熟するののかということで疑問をもったことがある。その時もある学園ドラマで教師が述べている言葉「人にはその歳その歳に咲かせるべき花がある。年をとってからその花を沢山持っている人の方がより幸せなんだ」ということを聞いて、花とはその歳々の一生懸命やっておくべきことであり、一生懸命取り組んだところに行ける、のちのちまで影響を与え続ける事例のことと思うようになった。思考の成熟もその歳なりに一生懸命対象と働きあうこととかかわるように思う。その意味でK男の指導を中心として取り組んだ授業は、彼にとってもまた私にとっても大切とすべき事例であり、両者にとっての一つの花だったように思う。問題解決学習のしみじみと湧き出てくる素晴らしい点の一つはこのようなものかもしれないと思っているものである。このような学習がなかったらK男も私も違ったありようしかなかったと思っている。

(三重・度会郡小川郷小学校)
(『考える子ども』1993年5月号より)

(社会科の初志をつらぬく会編『考える子ども』No.273, 2002年5月号, pp.90-94)